都会で子育て

子育てインタビュー

シンガポール在住5年。兄妹2人のお子さんを育てる上野あゆみさん（旧姓：川村）に、シンガポールの子育て事情について教えてもらいながら、同期（81回）2人がリモートインタビューしました。

日本との違いや子育てに理想的な環境とは何かを一緒に考えてみました。

★シンガポールの教育制度について

山本：シンガポールは国際的な都市だと聞いていますが、現地の人にとっても国際的な都市だと思いますか。

上野：シンガポール人にとっても国際的な都市であると思うけれど、学校生活に限ると外国人と関わる機会があるのは保育園・幼稚園までで、小学校はシンガポール人は公立校に進学し、外国人とは交わらない環境になります。ただシンガポール人と言っても、父親が白人で母親がシンガポール人、父親はシンガポール人で母親が日本人といったようにミックスはたくさんいますね。

山本：小学校からシンガポール人と外国人とで通う学校が分かれて交わらないというのはかなり独特な教育制度であるように感じますが、どのような思想に基づいて導入されたのでしょうか。

上野：エリート教育がシンガポールの特徴です。もうすぐ撤廃されるらしいPSLE（※注）（Primary School Leaving Examination）という12歳が全員受ける選抜試験があり、優秀な子供に早くから目をつけて、集めて効率的に英才教育を施すために導入されたそうです。

張：まさに昔の中国の科挙制度のようなもので、中華圏あるあるだと思います。中国は人口が非常に多くかつ貧富の差が激しいので、優秀な人材を選抜するには学力が最も公平な指標だと考えられています。中国では大学入試の18歳の時点で人生が決まると言われていますが、学校の教育も学力が上位の生徒のレベルに合わせて下を切り捨てる教育を行います。選抜のプレッシャーや過度な受験競争等で子供のうつ病の罹患率が高く、自殺率も増加して社会問題になっています。親に対するストレスも大きいので少子化の一因になっているという指摘まであります。

上野：シンガポールの教育制度は選抜の時期をもっと早めたものだと言えます。PSLEで進路が振り分けられて将来が決まるため、シンガポール人の通う学校は殺伐としていると聞きます。一方で息子が通うインターナショナルスクールは特にそんな様子はなく、息子の同級生でイギリス生まれのシンガポール人の子供は、そうした公立のギスギスした雰囲気を嫌って敢えてインターナショナルスクールに通わせているのかもしれません。

（※PSLEとは）
小学校卒業時にPSLE(Primary School Leaving Examination)という全国統一テストを行う。このテストの結果を受けて、中学校にあたるセカンダリースクールのレベル分けをする。このレベル分けというのがなかなかシビアで、その後の人生を大きく左右するものになっている。PSLEのテストで結果が出せれば、大学進学へ向けたクラスへと進み、特に優秀な一部の生徒はエリートコースへと進む。しかし結果がふるわなかった場合は、技術系のいわゆる職業訓練コースへと振り分けられることになる。この時点で技術系のクラスになってしまうと、大学への進学は至難の技だ。希望は残されていないわけではないが、PSLEで技術系に振り分けられた生徒が大学へ進もうと思うと、より複雑なプロセスと年数を要する。一度きりのテストで、その後の人生が決められてしまうと言っても過言ではない。そういった事情から、親たちはこのPSLEでいい結果を出そうと必死。12歳の子供に多大なプレッシャーがかかっている。

山本：日本の教育は、平均レベルを押し上げるのは得意だが、突き抜けた人材を育てるのは苦手と言われています。また日本は早期選抜に否定的な傾向があり、むしろ選抜が遅過ぎることが問題となっています。シンガポールや中国のように10代や20代での選抜であればたとえ希望する進路に進めなくても方向転換が可能ですが、日本の企業の管理職選抜は遅いと40代まで続くこともあるので、45歳ぐらいでキャリアが頭打ちになっても転職等の方向転換にもなかなか踏み切れず、モチベーションが下がったまま社内に居続けお荷物扱いされることも少なくありません。日本で最近よく耳にするリスキリングもそういった背景と関係があると思います。

★シンガポールの芸術・スポーツに対する考え方について

上野：評価基準という意味では、シンガポールでは学力や学歴が何よりも重視され、芸術やスポーツは軽視されています。実際に国としての経済力の割にはオリンピックのメダル獲得数は低迷しています。PSLEはペーパーテストではなく総合型の試験で、芸術やスポーツの経験をアピール出来るのでそのために習わせることもありますが、それでも子供にあまり運動をさせないので小学校中学年ぐらいの男子は色が白くぽっちゃりとした子が多いです。運動や芸術に触れる時間まで削って勉強をさせるというのはあまり健康的な生活とは言えないように思います。

張：中国の学校でも体育の時間を削って国数英に充てるといったことをやっています。運動の時間が少なく、更に勉強や習い事が多いため小学生から近視で眼鏡っ子も多いです。

山本：最近中国では、もう十分に経済発展したのでこれからは芸術やスポーツに力を入れていこうと海外のアーティストや芸術作品を呼び込むことに国としてお金を使う動きがあると聞きます。シンガポールが経済に重きを置いているのも国の発展を長期的に捉えた上の考えで、今後は中国のように国として芸術やスポーツに力を入れることも考えられるのでしょうか。

張：実際に中国では近年画廊経営や芸術品のオークションが盛んになっており、芸術に携わるのはおしゃれでお金持ちのイメージもあります。

上野：まさにそういった考えで、今後は芸術やスポーツにも力を入れていくようです。シンガポールの今の教育制度では、勉強は苦手だが芸術やスポーツの才能を持った子供が埋もれてしまっています。そうした子供たちにも光が当たるのは良いことだと思います。

山本：芸術やスポーツを軽視しているというのは、そういった教育面の問題もありますが、住環境として見た時に、アーティストやアスリートの地位が低いとそうした職業を目指す人も少なくなって、いざ芸術やスポーツをやりたいと思っても十分な設備がなかったり指導者がいないといったことにも繋がるのではないでしょうか。

上野：仰る通りで、設備や指導者の供給が少ないので芸術やスポーツをやるにはとてもお金がかかります。お金持ちでないとなかなか手を出せないですね。

上野あゆみさん（旧姓：川村）
高知生まれ高知育ち。
土佐高卒業後現役で京都大学に進学。日本でキャリアを積んだのち、夫の海外赴任に帯同しシンガポールに在住5年。2児の母（7、4歳）。長男がインターナショナルスクールに通学中。

インタビュアー
山本記央：
高知生まれ高知育ちで土佐高卒業後都内の大学に進学するが、卒業後高知に戻り、30歳で結婚の為再度東京に移住。1児の父（2歳）。労働組合で勤務する中約1年の育休を取得し子育てにも尽力。

張祖潤：
中国の北京生まれ。10歳の時に両親の仕事で来日。福井、金沢、高知に住んだのち大学進学を機に東京へ。日本在住25年。9年間歯科医療メーカーに勤めたのち起業。世界各国の教育事情や文化に高い関心を持つ3児の母（7、5、2歳）。

上野家のこと教えて下さい

①家族で出かけるお気に入りの場所はありますか？

Singapore Zoo
熱帯雨林に囲まれた動物園です。
OpenZooをコンセプトに檻を使わず柵や堀で、
囲まれた自然の中で 動物たちを身近に見ることができます。

Far East Organization Children's Garden
常夏のシンガポールにおいて重宝する水遊びスポット。
マリーナベイサンズを眺めながら無料で遊べるこの場所は家族のお気に入りです。

②お気に入りのテレビ番組を教えてください

6歳息子 ドラえもん（英語よりも日本語優位な息子は日本語のアニメを好みます。）
3歳娘 Paw Patrol （娘は英語の歌や分かりやすいストーリーの英語のアニメが好きです。）

③大好きな絵本は？

息子 日本語「バムとケロ」シリーズ
英語 National Geographic 発行の図鑑絵本
生き物や恐竜に興味があるので、自分で読める図鑑絵本が好きです。
娘 日本語 「のんたん」シリーズ
幼稚園では英語で絵本の読み聞かせがあるので、
家では基本的に日本語の絵本を読みます。

④自然に触れさせるために努めていることは

植物園の森の中にある公園に行くようにはしていますが、息子は暑さや虫が苦手です。（シンガポールは季節によってデング熱が流行ったりするので、蚊に刺されないように常に気をつけます。息子が幼い頃、蚊に刺されると私が過剰に反応していたので、虫＝恐ろしいものと認識してしまったのかもしれません。）

⑤夜一人になれた時の楽しみがありますか？

映画やアニメを見ながら夫とお酒を飲むこと

⑥子育てのことで夫婦で決めている事はありますか？

子供へ理想を持たず、希望を持つこと。子供の将来のため良かれと思っても、本人は勉強や習い事などやりたがりませんでした。本人の興味、やる気を汲み取りながら受け入れ、本人のペースで取り組むことを心がけています。

⑦家族の幸せはどんな時に感じますか

息子と娘が楽しく笑顔で遊んでいる時。想像力豊かな息子の創作ストーリーのもと、兄妹でごっこ遊びをしている時の息子の嬉しそうな笑顔と、ちょっと背伸びして遊べた娘の満足そうな笑顔を見て、二人の成長を見守れることに幸せに感じます

インタビューから

現地在住の日本人がそれぞれの国を紹介した媒体は数多いですが、商業目的の為か外国を持ち上げ日本を批判するものから日本を褒めちぎるものまで極端な内容が多く、逆に実態が掴みづらいと感じていたので、同期へのインタビューでより中立的な視点から海外事情に迫れたことは貴重な機会でした。自分自身も将来海外駐在の可能性があり、今回得られた知見を元に家族にとってより良い環境についてしっかり話し合いたいと思いました。(山本記央)

私自身は東京で会社を起業しており、会社の発展及び3人の子供の教育を考えた時にシンガポールへの移住を検討していました。特に子供の将来について、日本の受験レールのままでいいのかという疑問があり、グローバルな視点と環境が必要と思い今回のインタビューは実際に移住するか検討する大きな羅針盤になりました。同年代の子育て環境及び日本もよく知る上野さんの話はとても参考になることが多く、大変感謝しております。(張祖潤)

★シンガポールでの成功の象徴は？

山本：シンガポールで尊敬されるのはどういった人物ですか。

上野：やはりお金持ちでしょうか。

山本：お金持ちの中には人間性に問題があるような人もいて、日本ではそうした面が注目を集めあまり評価されないことも多いですが、シンガポールではどうですか。

上野：裕福な家に生まれ、本人も複数の会社を経営する著名な実業家の女性は私生活をゴシップとして扱われています。それでも彼女の実業家としての評価に揺るぎはありません。そういう意味ではシンガポールと日本は人物の評価基準が異なるように思います。ただ個人的には子供がお金持ちになっても人間性に問題があるようでは親としては喜べません。程度にもよりますが子供には平凡でも良い人柄の人間であって欲しいですね。

★シンガポールの親達の子育てとは？

上野：現地の友人に聞いてみたところ、シンガポールの親達も当然、子供にのびのび育ってほしいと願っているけれど、他の親達が能力主義的な考え方を変えない限り、社会構造的に子供に勉強させざるを得ない状況です。シンガポールでのエリートコースとされているシンガポール国内の有名大学に入ってホワイトカラーの仕事に就く事が皆の目標です。しかし、PSLEで高得点を取れても、その後の進路が安泰とは限りません。親の詰め込み教育で心が折れる子供たちがたくさんいるのです。不安定な思春期につまづき、自分を卑下したり、仲間はずれにされる子もいます。そうした中で、子供がタフに生きていくためには、安定した家庭環境が大事になるのではないでしょうか。

話を聞いて行くと、競争社会で生き残っていくための高い自己肯定感や精神的な強さが大事なのだと受け取れました。

★環境が子育てに大きく影響するように感じますね。

上野：シンガポールで生まれ育っても、自分のルーツとして日本に関心を持ち、日本の大学に進学したり日本で就職したりといった話も聞きます。子供がどういったことに関心を持ち、どう生きたいのかが大切です。その子の特性にもよりますが、積極的でなんでも自発的で自己主張の出来る子ならシンガポールで育ち、将来海外の大学を目指すのが良いかもしれませんが、そうでなければシンガポールは向かないのでしょうね。

張：海外で育って国際的な感覚を身に着けると、日本で大学に進学したり就職すると保守的な環境に戻ることはないかと心配です。ギャップに戸惑わず、インターナショナルスクールでの経験をプラスに考えられるよう親がある程度お膳立てをしてあげる必要があるのでしょう。そこの匙加減が難しいのですが。

上野：親としては子供の視野を広げてあげたいという思いがあります。自分自身高知の閉ざされた環境で育ち、高知はお金持ちといえば自営業者が多く大企業勤めの人があまりいないため、将来のキャリアやお金を稼ぐことについて学ぶ機会が限られていたと感じています。当時はインターネットも普及していなかったので、今の子供達はまた違った環境にあると思いますが、東京やシンガポールは高知では触れられない情報や身に着けられない知識を知らぬ間に得られる環境だと思います。

一方で、シンガポールで子供を育てると経済やイノベーションには関心を持つかもしれないが、子供を自然に触れさせたいと思ったら親がかなり努力する必要があり、自然科学に関心を持つことはあまりないように感じます。

山本：子供の視野を広げてあげたいという願いは親としてすごくよく分かります。結果として同じ道に進むとしても、いくつかの選択肢の中から自分で選べば納得感が違うし、上手くいかなくても自分で選んだ道だからと後悔も少ないと思います。

上野：シンガポールの教育制度は優秀な子供にとっては手厚い枠組みですが、子供には何よりも幸せになってもらいたいという多くの親の願いからすると少し理想とは違うと感じています。たとえインターナショナルスクールに通い続けられるだけの財力があっても、シンガポールという閉ざされた環境で子育てしていくことが本当に好ましいことだとは思いません。また自分自身は自然に囲まれた高知で育ったため、より自然や四季、芸術にあふれる日本が好きです。シンガポールはコンクリートジャングル。子どもたちは生まれながらに自然科学に興味が持ちにくい環境です。虫が苦手だったり、自然や四季を感じる場所があまりないのが残念に思います。